



生産やサービスと同様、交通体系や通信体系と同様、教育制度も、教育機関も、教員も、生涯学習活動もそのあり方については、一定程度、市場の検証を必要としている。構造改革は常に全体が「先」、個々人の利害や郷愁は「後」である。しかし、他の分野に比べて、教育分野の構造改革は実に遅い。筆者がこれまで論じてきたところを順不同に列挙すれば次のようになる。まずは、教育のあらゆる分野に外部評価を導入する。評価結果は人事の評定に反映する。学校は保護者の判断に委ねて選択制にする。

学校施設は地域と共用するコミュニティ・スクールに変革する。公立学校の一部に契約制のチャーター・スクールのパイロット事業を導入する。生涯学習(スポーツ)のアウトソーシングも、給食制度のアウトソーシングも、教職員の契約人事化も、終身雇用制度の廃止も速やかに実現すべきである。今はまだ何一つ実現できていない。しかし、これらを論じることが出来るようになっただけでも新しい時代が来たのである。いい時代になったのである。

## ● 2 ● 竹中政策の証明

教育行政や教育機関が市場に登場していないのは誠に残念である。筆者が研究上の理屈をいくら並べても、人は、聞きたくないことは聞こうとはしない。人間を実験対象に出来ない以上、人々に改革理由の十分な証拠を提出することはできない。現行の社会教育、生涯学習行政が「株」になっていたら対応は簡単である。「直ちに売りに出す」。さもなくば大損をする。生涯学習行政も、そこから生み出されるプログラムも、時代遅れも甚だしいからである。生涯学習行政も社会教育施設もその大部分は社会の必要に対応していない。ビジネスであれば、まず将来性はない。

小泉内閣の社会の診断は正しい。診断が正しいから、処方箋の構造改革路線も基本的に正しい。しかし、構造改革は遅々として進まない。残念ながら、正しいことが通らないのが世の常である。社会がもたもたしている分だけ、日本は国際競争力を失う。誠に残念である。「変わりがたくない」のは古い時代の「既得権勢力」の常である。従って、「既得権勢力」

が「抵抗勢力」になるのも世の常である。「抵抗勢力」の抵抗によって改革が進まないのは必ずしも総理大臣の責任ではない。内閣の責任でもない。声の大きいところに反応するマスコミはこの点を正確には見ていない。

先の衆議院議員選挙に際して、竹中金融・財政担当大臣を引きずり降ろそうとする動きはすごいものであったが、竹中政策の正しさは市場が証明しつつある。多くの企業も、トータルとしての市場もエネルギーを回復している。総裁選の対抗馬として立候補した3名の政治家の反竹中提案の政策の誤りはすでに市場によって証明された。竹中政策に反対した多くの評論家も最近ではテレビに登場せず沈黙している。政治も、経済も複合的な問題なので、研究者といえども、分析を誤ることは特に恥ずべきことではない。しかし、分析を間違った後の沈黙は恥ずかしいことであろう。政治や評論で「飯」を食っている人々は、少なくとも公表した自分の所論が間違っていたという事実は世間に表明して然るべきであろう。

## ● 3 ● リストラ企業を「買う」

政治家はもちろん、少数の例外を除いて、マスコミは竹中政策の成功をいわない。しかし、市場は正直である。リストラを断行した企業から業績が回復していることは明らかである。組織改革を断行し、技術革新を継続した企業から回復していることも事実である。リストラは常に暗い話になりがちであるが、

構造改革にリストラは不可欠である。個々の状況に同情すべき理由があり、暗い話がうまれることも確かであるが、全体のシステムにとって、余分な労働力が不要である事実は変わらない。役に立たない労働力が不要である事実も変わらない。「不要」なものは「有用」なものに変革しない限り、産業も組織

も再生はしない。冷たい言い方に聞こえるかも知れないが、再生するためにはリストラは不可欠である。全体の構造的欠陥を是正できなければ、企業そのもの、産業そのもの、社会全体が沈むからである。古くて新しい議論であるが、常に政策や組織においては「全体」が「先」、「部分」は「後」である。市場は

未来の希望に反応する。「株」も「債権」も、リストラを断行した企業から買う。その多くがV字回復を遂げたからである。組織改革も、技術革新も同じである。構造改革を断行した企業は生き残る。結果的に「株価」も回復する。それが市場による検証である。

## ● 4 ● 生涯学習診断の市場検証

生涯学習行政の構造改革を市場原理に直結できないことは当然であるとしても、改革の背景を為す論理は同じである。不要な人員は整理する。需要に対応できない組織は改革する。施設も、制度も、プログラムも、時代にマッチしないものは「退場」させなければならない。社会全体の構造変動が起っているのである。全体の変動に見合った構造改革を断行しなければ、市民生活の問題には対処できない。無用になった産業も、機能しない組織も、必要に応

え得ない施策も時代の舞台から退場させるべきである。「株」や「債権」はあらゆる意味で「構造改革企業」を買う。学校も公民館も生涯学習政策も仮に市場に出ているとしたら、それらの「構造改革プログラム」を買う。しかし、現状の生涯学習株は危なくとも買えない。行政は、まず企業に倣って、リストラ、アウトソーシング、異分野間連携、総合化、複合化、プロジェクト化、ゲリラ化を始めるべきである。それが生涯学習行政の構造改革である。

## ● 5 ● 「アウトソーシング」—戦略的外部委託

「アウトソーシング」は日本企業の基本戦略となった。本業以外は贅肉を切り捨てて戦略的に外部に委託するという方法である。結果的に、「契約」が基本的な仕事のやり方になった。それゆえ、契約更改に伴う「外部評価」、「市場評価」は不可欠である。かくして、人材派遣業が生まれ、食堂機能の外注が生まれ、各種戦略的「請け負」業が専門化した。このことは当然日常生活スタイルと連動している。家庭内の食事の多くが外食の形で外部化され、クリーニングも外部化され、家事の代行サービスも始まり、惣菜屋さんも栄えている。学校の給食を「外部化」しない行政の気が知れない。現行の給食組織は内容的にも、サービスの点でも専門業者にかなうはずはないのである。給食センターを抱え込んだ財政上の非効率性は論じるまでもない。

外部化は家事に留まらない。家族の「本丸」ともいべき教育が社会化され、保育が社会化され、介護も社会化されつつある。学童期の児童の放課後や休業中の世話も、現状は遅々たるものであるが、子どもの「居場所づくり」から始まって外部化される。

いずれはほぼトータルに「養育」の社会化が起る。それは女性の社会参画を進めて来た必然の結果である。やがては男女共同参画を望まない「変わりたくない男たち」も外部化の状況を受け入れるようになる。

このような状況に鑑みれば、生涯学習の構造改革を断行しない限り社会の要請に応えることが出来ないのは明らかである。もはや従来の社会教育行政のやり方では対応は不可能である。社会教育職員の能力でも対応は不可能である。子ども会の指導も、青少年キャンプも「アウトソーシング」は不可欠である。最も優れた機能、最も優れた人材、もっとも経済効率のいいやり方を必要な時に、必要な分野に投入することができる組織だけが住民の要請に応え得る。結果的にそのような仕組みだけが生き残る。

水泳やアスレティック・ジムのように生涯スポーツ事業が民営化されつつあるのはその証拠である。惣菜屋が繁昌し、レストランが軒を連ねるようになったということは社会教育施設の食堂は民営化し、学校給食も民営化すべきことを物語っている。給食の

直営を廃止することによって浮いた予算はプログラムの運営費に回すべきである。その運営もにわか仕立ての公民館担当者や社会教育主事にまかせないで民間から契約によって有能な人材を派遣すべ

きである。結果的に、やる気のない公務員の数を一気に縮小することができる。給食を引き受ける企業の「株」は「買い」である。

## ● 6 ● 高齢化、情報化、余暇時間の増大、高学歴化 一生涯学習とライフスタイルの多様化

生涯学習では、変化のタイトルだけを”空念仏”のように唱える。その一つが情報化である。にも関わらず現状ではあらゆる講演の依頼文書は郵便で来る。メールでレジュメが送れない教育委員会や公民館も数多い。情報化時代を唱えながら、時代遅れの事務処理をしていたら、企業なら潰れるであろう。潰れないようにするためには電子化は避けて通れない。当然、市場において、事務作業を電子化する企業の「株」は「買い」であろう。

高齢者の生活は「余暇時間の増大」と「高学歴化」の特徴を呈している。その結果であろう。高齢者の旅行は生涯学習の旅になりつつある。これまでの「ツアー・コンダクター」では対応が出来ない。俳句の旅、考古学の旅、郷土史の旅、焼き物の旅、時には「地中海文明の旅」などに分化が始まっているのである。もちろん、旅も、ガイドも有料である。「生涯

学習の旅」を組織化する企業の「株」も「買い」である。同様に、生涯スポーツを企業化している会社の株も「買い」である。生涯学習社会では質的な多様化が進行している。高齢者の心身の機能を維持・保全しようとするれば、多様な活動を提案するしかない。もはや、これまでのような税金による無料のプログラムだけでは生涯学習の活性化は図れない。公金投入の説明も出来ない。第一、投入すべき資金はほとんどない。公務員の人件費など行政の維持管理費に消えてしまっているのである。事業費がないのに生涯学習担当職員だけがいるという滑稽な状況が出現している。予算がないのであれば、職員を減らして担当者とプログラムを外注すればいいのである。それが「アウトソーシング」である。時代状況を的確に判断できる人材派遣会社の「株」も「買い」である。

## ● 7 ● 「生涯学習の構造変動に関する市場分析研究会」

筆者はこの数年多くの教育行政を回って現状の分析、施策の提案を行ってきた。しかし、漠然とした同意は得られるが、公民館も行政も筆者の診断を実践に移す動きはない。多くの場合、社会教育の関係者は現状を否定する論理を聞く耳は持たない。残念ながら、筆者の分析も客観的な証明は難しい。僅かな実践のフィールドに頼って、ささやかな「パイロット事業」を試みているに過ぎない。そこで過日、生涯学習フォーラムの企画委員会のみなさんに一つの提案をした。生涯学習施策の提案理由を分かってもらうために「市場分析」による検証をしようという提案である。

「瓢箪から駒」ならぬ、「冗談から駒」である。新しい研究会の仮称は「生涯学習の構造変動に関する

市場分析研究会」とでもしようか！分析結果に基づいて「株」や「債権」を購入してみる。東大の竹内佐和子教官が投資会社の社長を兼ねているように、理論と実践の両立を証明したいのである。生涯学習の施策背景の分析が誤っていなければ「株」の利益が出るだろう。変革の理屈は市場で証明する。投資には老後の生活資金が絡むので当方の分析も「真剣」になる。論より証拠、やってみないか、と教え子や若い行政マンに説き始めたこの頃である。当然、「隗より始めよ」である。率先して筆者の理論の「市場検証」を始めた。論理が誤っていない証拠は成果に現れる。当面、成果の中身は「企業秘密」である。 ■

# 今、なぜ子どもの「居場所づくり」なのか？

中国・四国・九州地区生涯学習実践研究会での出会いの御縁が廻り廻って沖縄県西原町にお招きをいただいた。講演は表記のテーマで依頼があった。しかし、筆者には、現代の少年問題は、「居場所」を作っただけではダメだという強い思い込みがあった。多くの学童保育や福岡県の「アンビシャス広場」事業のように「居場所」を作っただけでは、少年の集団も、少年の活動も、少年の「生きる力」も育たない。必要なのは子ども集団の育成であり、「活動」の意図的な組織化であり、指導である。要は、組織化と指導の「原理」と「中身」と「方法」であると力説した。結果的に、講演はテーマと中身が大きくずれてしまった。後になって、「居場所づくり」に関心があった方々には飛躍し過ぎていただろうと大いに反省した。西原町へのお詫びを兼ねて改めて「なぜ『居場所づくり』なのか」を整理してみた次第である。

## I 今、子どもはどのような状況にあるか？

### (1) 「居場所」、「遊び場」がない .....

子どもの「居場所」を行政が準備するということは、すでに子どもの周りに安全で、快適な「居場所」がないということを意味する。地域は既に昔の地域ではない。したがって、想定される理想的な「居場所」は学校である。学校は子どものために設計されている。環境も子どものために整備されている。それなのに学校は頑として地域にも、放課後や休業中の子どもにも施設を開くことはしない。「養育」が社会的機能になったという認識がないからである。教育行政も学校の施設開放を強力に指導することはない。教育行政にも養育支援の認識がないからであ

る。恐らくは、行政分業の論理に則って養育は「福祉」の担当であるといいたいのであろう。しかし、子どもの危機的状況を分析すれば、福祉と教育の統合は論理的必然である。子どもの居場所の確保には、学校の開放が必然である。原理的には、文部科学省が学校を生涯学習施設として認定するだけで解決する。活用の具体策は、学校の地域開放を指示する通達1本で解決する。教育行政の現状は既存システムの呪縛に制約され、この程度の整理ができないほどに哀しい認識のレベルである。

### (2) 能動的、全身的、集団的運動・遊びをする時間が少ない .....

大方の研究報告を読めば、子どもの日常を構成しているものは、テレビと塾とゲームと学校である。子どものスケジュールの中に家族との同行はあまり出て来ない。友だちとの同行もあまり出て来ない。社会参加の機会もない。発達途上にあるにも関わらず、全身運動も足りない、集団的遊びも少ない。現

状ではそうした活動をする時間も、条件も少ないのである。それで子どもは大丈夫か、という社会の心配はもつともなのである。

心配の背景には子どもの生活の「受動性」があり、テレビやゲームの「擬似環境」がある。メディア環境に没入する時間が多くなれば、子ども達が自らの

肉体や自然から遊離する危険が増すであろう。漠然たる危機感の淵源はそこにある。子どもの自主性、主体性、積極性、能動性が重要であると言うのであれば、時間の消費が受動的になるのは極めて危険である。自主性も、主体性も、積極性も、能動性も、すべて自主的、主体的、積極的、能動的活動を通してしか「体得」することができないからである。同様に、己の肉体や感覚の向上も、自らの肉体、感覚を駆使して初めて可能になる。テレビやゲームの擬似環境に浸っていれば、汗も、苦労も、疲労も、痛みも、空腹も、筋肉の躍動も、風の心地よさも知る由もない。これらはすべて身体を通して実感する以外分かりようがないのである。まして、自然も世間もその実

態に触れる機会が少なくなれば、子ども自身が「自然」ではなくなる。自然として生まれて来た子どもが自然から遠ざかり、子どもが自然の一部を構成しなくなる時、人間に何が起るのか？われわれははまだ知らない。但し、人間の中の「自然力」とでも呼ぶべき、体力も、生きる気力も、肉体の感覚機能の多くも衰えるであろうことは疑いない。能動的で、自然の実態と社会の現実に触れて成長した「自然世代」と、その機会を失いつつある「不自然世代」が大きく異なるであろうことは想像に難くない。少年の無気力も、彼らの凶悪犯罪もどことなく「不自然世代」の成長の停滞を暗示していないか？

### (3) 子ども集団は形成されていない

「居場所」がなければ、当然、子ども達は集まらない。集まって活動が出来なければ、仲間は出来ない。「居場所」の不在は、子ども集団の不在を意味している。現代の地域環境、現状の生活環境では、集団の作り方は子どもに伝わってはいない。集団での遊び方も子どもには伝わっていない。仲間集団が最も重要になる少年期の一時期を「ギャングエ

イジ」と呼ぶ。子どもは群れの中で社会生活の予行演習を行なう。少年集団が不在だということは多くの子どもが「ギャングエイジ」を通過していないことを意味する。だからこそ、居場所での活動メニューが重要なのである。仲間集団を育てる指導者が重要なのである。

### (4) 「生きる力」が衰退している

居場所がなく、集団がなく、日々の生活が「受動的」であれば、社会生活の「予行演習」を十分にすることはできない。思いきり身体を使う機会がなければ体力はつかない。難しい課題に挑戦しなければ、

耐性は育たない。結果的に、「生きる力」の5大条件は十分に獲得出来ていない。5大条件とは「体力」、「耐性」、「道徳性」、「基礎学力」、「やさしさや思いやりの感受性」である。

## II 子育て支援プログラムの目的

プログラムの目的は家族と子どもの現状への対応である。「居場所」がなければ、居場所を作る。活動がなければ活動を作る。指導者がいなければ指導者を住民の中から確保しなければならない。すでに地方自治体には日常的な子育て支援に専門家を配置する財政的余裕はない。社会教育も、福祉も公的な予算で指導者を養成・派遣する余裕はない。そうした状況の中での子育て支援を発想しなければならない。

### (1) 学校開放の重要性

今、子育て支援の最大の目的は子ども集団を形

成できる「居場所」の確保である。子どもにとって安

全で、保護者にとって安心な「居場所」の確保である。それは「学校」に外ならない。学校は子どもが毎日通い慣れている。毎日使っている。子どものために設計された施設である。子どものために準備された環境である。放課後や休業中に子どもが学校施設を利用することを拒否する校長や職員会議は子どもの「敵」である。育児と社会参画を両立させようと日夜奮闘している女性の「敵」である。関係者は自覚していないであろうが、理念的には、男女共同参画思想の「敵」である。

ほんの僅かな工夫をすれば学校に迷惑をかけない施設利用は難しいことではない。校長が管理責任に耐え切れない、というのであれば、管理権を教

育行政に移管すればいい。「空き教室」を活用するのではない。使用中の施設でも工夫をして「共用」するのである。子育て支援が重要であるというのであれば、校長の管理責任が大事なのか、それとも子どもの安全や向上が大事なのか？学校は事の重要性を評価し、その答を公表すべきである。あくまでも管理や学校教育だけが大事であるという学校は「チャータースクール」方式によって民間に移管すればいいのである。

しかし、教育行政もまた学校の指導が出来ないほどに事態の認識が薄い。教育は「養育」を門外のこととして消極的にしか捉えていないのである。

## (2) 居場所は必要条件、活動プログラムを加えて十分条件 .....

居場所を確保するだけでは最低の必要条件が整ったに過ぎない。豊かな活動メニューがあつて初めて十分条件が整う。従来の子育て支援にはプログラムが稀薄であった。これからの子育て支援はプログラムが鍵である。子どものための放課後および

休暇中の健全育成プログラムを提供するシステムが整った時初めて「子育て支援」と呼ぶべきであろう。学校外の活動目的もまた「生きる力」の形成であることは論を待たない。

## (3) 内容の多様性、方法の弾力性 .....

活動の内容は多様であることが望ましい。子どもはそれぞれに個性的である。興味や関心も異なる。子育て支援の方法も弾力的でなければならない。家族は様々な課題に直面している。保護者も多様な状況にある。子育て支援も多様でなければならないのはそのためである。しかし、行政には人的にも、財政的にも、大規模支援の力量はない。本気で支援事業をやらうとすればボランティアの力を借りなけ

ればならない。しかし、日本文化にとってボランティア思想が外来のものであることは明らかである。日本社会はいま子育て支援においてボランティアの定着実験を始めようとしているのである。日本型ボランティア制度の確立に成功すれば、「ボランティアの縁」が子育てを支え、地域の活力を支え、新しい人間関係のネットワークを形成する時代が来るのである。 ■

### 第45回生涯学習フォーラム「この指とまれ」

日時：平成16年4月17日(土)15時～17時、のち「センター食堂にて夕食会」

場所：福岡県立社会教育総合センター

テーマ：学力とはなにか？学力向上の方法とはなにか？

事例発表者：交渉中

参加論文：学力とはなにか？学力向上の方法とはなにか？(仮題) (三浦清一郎)

フォーラム終了後センター食堂にて「夕食会」(会費約600円)を企画しています。準備の関係上、事前参加申込みをお願い致します。(担当：肘井)092-947-3511まで

## 行政による子育て支援システムの創造

第44回フォーラムは「行政による子育て支援」を取り上げた。福岡県の「アンビシャス広場」から文部科学省の「子ども教室」まで子どもの「居場所」を確保しなければならないという意識は社会に定着しつつある。問題は“居場所で何をやるか”である。「居場所」が出来たところで、現在はほとんど何もやっていないに等しい。養育は社会が引き受けるべき時代が来たのである。散発的事業では対応出来ない時代が来たのである。事例発表は宗像市子ども課の日野砂男課長にお願いした。宗像市においては少なくとも子育て支援行政を「子ども課」に集約しようという意図は明確である。論文参加は「『養育』の社会化—行政による子育て支援の必然性」(三浦清一郎)である。

### ■ 1 ■ 「子ども課」への集約

宗像市の「子ども課」は教育行政に属している。主な事業だけでも実に多彩であり、盛り沢山である。「子育て講座」、「子育て支援ボランティア養成講座」、「家庭教育学級」、「子育てサロン支援事業」、「コミュニティ子育て交流事業」、「通学合宿」、「子ども祭り」、「子ども新聞」、「小学校セカンドスクール事業」、「中学校職業体験事業」、「ニュージーランド交流事業」、「学童保育所施設改修事業」などである。日野さんの迷いは教育行政の限界に関係している。首長部局と連携できなければ、学校外の総合的なアプローチは出来ないのではないか、という疑問に発している。子どもの「居場所」を準備しなければならない状況で散発的な事業を積み重ねても問題の核心には迫れない。総合的な対応も不可能である。宗像市も相変わらず子育て支援と学校は無縁である。学童保育の施設修理を特別に予算計

上しなければならないのが象徴的である。講座は沢山あるように見えるが、子どものすべても、保護者のすべてもカバーできる筈はない。学習や交流の必要な人々に必要なプログラムが届いている保証もない。

日野さんの直観は当たっている。福祉と教育を統合した子育て支援が不可欠になったのである。しかし、教育行政の中ですら学社共催の子育て支援事業は出来ない。まして、福祉との統合事業は困難である。「子ども課」は事業を総合化し、統合化し、分野横断型のプログラムを可能にするはずであったが、散発の事業と教育行政の壁がそれを阻んでいる。現行のシステムを抜本改革するか、分野横断型の「プロジェクトチーム」を創るかしない限り総合化は実現しない。なぜなら、教育行政の認識には未だ「養育」の社会化発想は存在しないからである。

## ■ 2 ■ 「外部化」の必然

家事の外部化は女性の社会進出がもたらした必然である。もちろん、それを可能にしたのは豊かな社会の分業の進化である。企業は、今になって「アウトソーシング(戦力的外部委託)」の重要性を言うようになったが、家族はその構成員の能力的制約に鑑みて、多くのことを「外部委託」せざるを得ない宿命にあった。近代家族においては「教育」がそのはしりであった。教科教育は家族の能力を越えてい

る。かくして、学校教育はその道のプロに委託せざるを得なくなった。最近では「介護」も同様の方向を辿っている。外部化が進む理由は、「委託」を可能にする財政能力と「委託」せざるを得ない家族の状況である。保護者の多くは”共稼ぎ”の労働形態に移行し、多くの家庭は「委託」の可能性と「委託」の必要性の両面で子どもの外部保育;社会の子育て支援を必要とするようになったのである。

## ■ 3 ■ 家族における養育・教育の機能の喪失

子どもの養育に関して家族の構造が著しく変化した。変化の第一は「核家族化」であろう。変化の第二は「女性の就労」である。核家族化は結果的に、育児の知識も、技術も前の世代から伝達されない。「かぎっ子」から始まった家庭の養育力の衰退は、保育所の拡大や「学童保育」の誕生に繋がったが、いずれも失われた養育力を補完するに至っていない。家庭の養育力は衰えるにまかせた。家庭の子育てはますます危機的状況を深めたのである。家族は自らの養育機能の衰退を意識し、自覚し、危機を感じている。しかし、もはや家族の対応には限界がある。教科教育のような専門分野の「外部化」に疑問は持たなかった行政や家族も、養育の「外部化」には大いに抵抗があった。「養育」は歴史的に最も基本的な「私事」であったからである。それが親の「子育て責任論」である。「製造責任論」という人もいる。民法は子育ての「私事性」を「親権」という思想で保証している。

しかし、一方では、男女共同参画の思想が普及すると共に、女性の就労、女性の社会参画は増大の一途を辿っている。女性が外に出れば、従来の性役割分業は崩壊する。育児の分業の代わりに育児の「共業」に移行できれば、養育をここまで危機的な状況に追いこまずに済んだかも知れない。しかし、社会は変わらず、男も変わらなかった。子育ての「共業」は全く進まなかったのである。逆に、「子育て以上に大事なことがあるか? !」というのが「変わりたくない男」の決り文句であった。同じことは「性役割分業」を承認した「専業主婦」も主張した。その

思想は「女性よ、家庭に帰れ」のスローガンが代表している。筆者を含めた研究者の多くも子どもの現状を心配して、家庭の「子育て責任」を唱えた。学校関係者も「家庭の子育て責任」を唱えた。男女平等は文言に留まり、男女共同参画は社会の「多数派」の意識をとらえるに至っていなかった。もちろん、文明は急速に進化したが、「パワーステアリング」も、「自動化」も、男女の「筋肉」機能の相違を消滅させるまでには至っていなかった。従って、「筋肉文化」は揺るがず、「養育」の社会化はいまだ社会の認知するところではなかった。結果的に、制度的な子育て支援は遅々として進まなかった。もちろん、男が育児を担当することは皆無に近い。当然「しわ寄せ」は子どもに集中した。「子育てが大切である」ことを認めながらも、「女性の就労」も「女性の社会参画」も同じように大切であることが認め始められた。「どちらを取るのか?」と多くの女性が選択を迫られた。最終的に女性は「社会参画」を選択した。男支配の「筋肉文化」も渋々それを認めた。しかし、「筋肉文化」を変革することなく、「養育」の社会化を具体化せずに、子育てと女性の社会参画を両立することは不可能である。結果的に、家族は養育・教育の機能をますます失いつつある。経済的必要が女性の労働力を必要とし、社会的思想が女性の社会参画を促し、「変わりたくない男」が変わろうとしなかった時、多くの家庭は子育てを断念せざるを得なかった。「少子化」は女性の決断である。「少子化」は必然であった。



## 見えない証 『自分の子どもがこの学校に来ればいいのにね！』

ある小学校のモデル事業を支援し始めてほぼ2年が経過した。筆者は教育大学に10年以上も奉職した経験があるが、学校と仲良くなれたのは初めての経験である。モデル事業一年目の途中からの参加であるが、個々の先生方と協力して仕事が出来たと実感できたのも初めてである。転勤の別れの挨拶をいただくのも初めてのことである。ことほど左様に筆者の論理が学校に受け入れられることはなかった。

別稿「子どもの居場所」に書いた通り、子育て支援事業の企画に関わってみれば、学校はいまだ「コミュニティ・スクール」からほど遠い。生涯学習施設にもなっていない。今でも大方の職員会議、大方の校長、大方の”学校教育委員会”教育長は子育て支援の「敵」であり、生涯学習の「敵」である。日本の学校は社会が必要とする「構造改革」に最も遅れた部門である。同様に、学校教育行政も学校の遅れを自覚出来ないほどに遅れた部門である。それゆえ、この小学校のモデル事業はささやかながら筆者の論理の突

破口となりつつある。先生方との初めての「協働」が成立して、筆者の発想の情緒的基盤ともなりつつある。小学校との「協働」は、気持ちよく仕事が出来たというに留まらず、教育活動の効果を生み出し始めたからである。

担当の先生方が記録をとって下さったので子どもの体力向上が実証出来ている。日々のドリルやテストの結果も蓄積してきたが、学力も見事に向上している。評価のしにくい分野の評価基準の設定についてはまだ多くの問題点があるが、少なくとも主観的、印象的には学校内外の様々な評価結果が向上している。平成15年度の総括研修会では、基本報告の後、先生方全員と長崎県や福岡県の関係者を加えて懇親の会を持つことになった。筆者も何人かの先生方と車座になって仕事の後の心地良いおしゃべりを楽しんだ。懇親の席でも話は子ども達のこと集中する。この学校のやる気を象徴しているであろう。話がそれぞれの家族に及んだ時、「みなさんの頑張りが家族の負担になっていません

か」という質問をした。これだけのプロジェクトに参加すれば、それぞれに個別の問題に当面するだろうことは想像に難くないからである。期せずして先生方の感想が一致した。それは「自分の子どもがこの学校に来ればいいのにね！」という事であった。この感想こそが、モデル事業が成功している「見えない証」である。「ほかの学校の授業参観に行くと言いつつ歯がゆいのよね」と言いつつ車座は大笑いになった。記録は大事である。評価を積み重ねて行くことも大事である。しかし、最も大事なものは、「この学校に自分の子どもを入れたい」という先生方自身の実感であろう。先生方はそれぞれに自分達のやってきたことを自分の言葉で説明できる。それぞれの分野で効果も明らかになりつつある。教員組織の連帯も共同も疑いなく強まっている。校長先生は始めの挨拶から終わりの言葉まで教職員のがんばりのお陰です、と繰り返す。学校は誇りを持っている。モデル校事業が成功した見えない証である。 ■

# MESSAGE TO AND FROM

メッセージをありがとうございました。今回もまたいつものように編集者の思いが広がるままに、お便りの御紹介と御返事を兼ねた通信に致しました。みなさまの意に添わないところがありましたらどうぞ御寛容にお許し下さい。

## ★ 福岡県宗像市 山口恒子様

一遍の詩が辿った変遷は実に面白いものですね。サミュエル・ウルマンが雑貨商のかたわら詩を書き続けたと言うことは知りませんでした。まして、「青春」がマッカーサー元帥の座右の銘であったことも、松下幸之助氏の座右の銘であったことも知りませんでした。さらに、日本という遠い異国の地で、工場の落成式に祝い品の品として「青春」を額縁に入れて、人々にお配りした社長さんまでいたということは詩人冥利に尽きることでしょう。漢文調の訳詞も大いに気に入りましたが、今回は最後の一節が心に残りました。人は「全くに老いた時、神の憐みを乞うるしかない」、とはようやく想像の地平線に現れ始めた感想です。「青春」に支えられた我が改革への実験は、当時の（恐らくは現在においても）大学の実情に鑑みれば、明らかに向こう見ずな冒険でした。教え子達と同様、最後までおつき合いただき誠に有難うございました。

## ★ 北九州市 仲道 正昭様

若松で行なわれた研究会の記録を興味深く拝見いたしました。多くを学びました。評論の魚にされることは「胸に棘刺す」ことも多いのですが、公開で意見を述べることを生業としている以上仕方のないことなのでしょう。冊子をお造りになるプロセスで「書くこと」が大変だったという感想が一番心に残りました。丁度、今、自分自身が痛感していることに重なったからなのでしょう。印象評価は簡単ですが、印象を論理にするのは時に高い崖を跳ぶような心地がします。人は聞きたいことだけを聞き、見たいものだけを見る。この事実は動きませんね。小泉総理大臣がワ

ンフリーズしか言わないというのも書きたいことしか書かないというマスコミの一方性にうんざりしているからなのでしょう。私も一つの問題、一つの論理で切り込み続けようと感じた次第でした。

## ★ 福岡県春日市 神田芳樹様

自分自身のことながら講演評価の「様式」を感じ入って拝見しました。聴衆に心に残った「キーワード」を書いていただくという評価法は講演者にとって新鮮な驚きでした。全部の評価票に初めて目を通しました。通常、ありきたりの行政評価は無視するか、あるいは投げ捨ててしまう筆者だったのですが……。当方の意図に関わりなく「受取るもの」がそれぞれに異なるということは知っていましたが、人々の「誤解」の大きさは想像以上でした。第一設問に続く、「なぜそれをキーワードと感じたのか？」という質問の答えも大いに興味深いものでした。話し手の側が明確に提案したつもりでも、強調して主張したつもりでも、呆れるほどに相手に話し手の意図が届いていないことは明らかでした。講演の主旨と関係のないことまで届いていることも新鮮でした。まさしくあらゆるコミュニケーションに「誤解の自由」があるのですね。「同じ講演者の講演を『別のテーマ』でも聞いて見たいと思いませんか？」という第3の質問への答えも恐る恐る読みました。最後の設問には、「同じ講師の講演が聞ける機会を知ったら他の方々にも紹介したいと思いませんか？」とありましたね。お見事な視点でした。頑張って講演技術を磨きます。PTAの会長としてぜひ学校の教員にも同じ評価票で試してみてください。

## ★ 島根県掛合町 和田 明様

公民館の方針と評価報告書が届きました。事業の分類ごとに基盤事業、主催事業、支援事業、広報事業、貸館事業と順に拝見いたしました。次は異分野統合事業、異分野共催事業の「見出し」を拝見したいものです。子育て支援も、高齢者の介護予防も福祉分野と共催・統合し、実質的に財政負担を減らせるような評価をやってみませんか？ 国に縦割り行政を修正する意志がない以上、実質的統合

は小規模市町村から始めるしかありません。人員も、財政もきびしい昨今、生涯学習の突破口はそこにかないと確信しております。早乙女5のみなさん(?)によろしくお伝え下さい。

過分の郵送料をありがとうございました。

山口県楠町 上田展弘様

## ◆◆◆◆◆ 編集後記 少年の歌、熟年の歌 ◆◆◆◆◆

薩摩の郷中教育には「朝読み、夕読み」という優れた伝統がある。音読による表現形式や文学作品の習得法である。しかし、日本の学校では、「つめこみ主義」のレッテルを貼って「型の学習」を排斥してきた。「朝読み、夕読み」は久しく捨てて顧みられることのなかった教育法である。しかし、ようやく近年「声に出して読みたい日本語」などが注目され始めた。何よりのことである。

筆者は「朝読み、夕読み」の手法を20年前の少年キャンプの研究に導入した。今回は、その時の記憶を再現して、ある町の子育て支援事業の活動に「朗読」のプログラムを入れようとしている。すぐれた日本語を子ども達に音読させ、氣息を整え、併せて表現文化の基本教養を培うことが目標である。さっそく音読の素材になるような詩歌を探してみた。ところがぴったりする材料がなかなか見つからない。素材は指導者や保護者にとって親しみ易くなければならない。表現文化の基本教養であると同意していただけるようなものでなければならぬ。もちろん、すぐ理解できるとは期待しないが、繰り返している内に子どもにもそれなりに理解可能なものでなければならぬ。指導者の説明を聞き、朗読を繰り返している内に徐々に身体に染み込んで行くようなものを選びたい。

久々に書棚から様々な詩歌集を引っ張り出して拾い読みをした。かなりの時間を費やしたあげく、

結局は定番の詩歌に落ち着いた。「始めの詩」は宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」、中間の素材には日替わりができるように複数の俳句と短歌をそれぞれに選んだ。悩みに悩んだが日本人の評価が定まっていることを重視して、俳句は一茶、蕪村、芭蕉の中から選んだ。短歌もそれぞれに捨て難いが、人々の好みもあろうかと配慮して、「自分、父母、ふるさと」を主題として6人の歌人から一首ずつを選んだ。「終わりの詩」は全力投球した一日の終わりの静かな充実を子ども達にも実感させたいと願って、堀口大学の「夕暮れの時はよい時」を選んだ。20年前の少年キャンプの研究の時と同じ結果になった。

拾い読みを繰り返した選別作業の過程で、若い頃には気にも止めなかった歌に気付いた。今になって読むと実に新鮮であった。同じ年齢層の読者もいらっしやることだろう。熟年が見つけた新しい歌を紹介して編集後記に代えたい。

いつのまに別れしものぞ別れむと君も云わなくわれも云わなく (吉井 勇)

60年も生きて来るといろいろある。別れのあいさつをせずに別れた人も一人や二人ではない。忘れることはないが、これから会うこともまずないであろう。今更に勇の歌が心に滲みる。

男をば罵る彼等子を生まず命を賭けず暇ある  
かな（与謝野晶子）

平塚雷鳥が創刊した女性解放運動誌「青鞥」に「山は動く」と一文を寄せたのは晶子である。そして上記の歌を詠んだのも晶子である。この歌の前では、筆者が関わってきた男女共同参画の仕事が惨めに思える。家を守り、何人もの子どもを生み育て、歌人としてすさまじいばかりの作品を残した晶子のエネルギーに讃嘆せざるを得ない。かつては多くの母がこの歌のように生きた。

桜ばないのちいっぱい咲くからに命をかけて  
わが眺めたり（岡本かの子）

この歌は子ども達の朗読素材に取り上げてみた。はたして彼等がどのように分るだろうか？筆者も少年の頃にかの子のようなはげしい歌を知っておきたかったと深く思ったことが採用の動機であった。

われ死なば靴磨きせむと妻はいふどうかその  
節は磨かせくだされ（吉野秀雄）

わが娘と息子に教えてやりたいと思った歌である。ひたすらおのれの病いと戦い、子を守り、妻を守り、妻に先立たれ、二人めの妻も必死に守ろうとする秀雄の気迫は”おどけて”いても読むのが辛いほどである。

中原中にも「冬の長門峡」という詩がある。”蜜柑のような夕日欄干にこぼれたり、ああ—そのような時もありき、寒い寒い日なりき”と詩は終わる。誰の人生にも家族のために戦おうと思った日はあるだろう。心細くても自分でやるしかない。哀しくて切なくてどうしようもない時でも自分でやるしかない。寒い寒い日もある。

新しき明日の来るを信ずといふ

自分の言葉に

嘘はなけれどー（石川啄木）

少年時代以来一番わかるのが啄木である。幼き日から啄木に巡り会えてつくづくよかったと思うこの頃である。

### 『編集事務局連絡先』

（代表） 三浦清一郎 住所 〒811-4145 福岡県宗像市陵巖寺2丁目15-16  
TEL/FAX 0940-33-5416 E-mail sdmiura@fj8.so-net.ne.jp

『風の便りの購読について』 購読料は無料です。ただし、郵送料の御負担をお願いしております。『編集事務局連絡先』まで90円切手9枚 または 現金(810円)をお送り下さい。

\* 尚、誠に恐縮ですが、インターネット上にお寄せいただいたご感想、ご意見にはご返事を差し上げませんので御寛容にお許し下さい。

『オンライン「風の便り」』 <http://www.anotherway.jp/tayori/>